ウィルダネスへの招待状

APPROACH TO THE WILDERNESS

SEROW 225

MOUNTAIN TRAIL

YAMAHA

YAMAHA MOTOR CO.,LTD.
2500 SHINGAI IWATA-SHI SHIZUOKA-KEN JAPAN

THE HEART OF WILDERNESS

SEROW

ウイルダネスへの招待状。

偉大なる大自然。その懐に抱かれたとき、人は誰よりも自由になれるという。
しかし、自然はあたたかくも、厳しい。入るには、求められるものがある。
それは、自然のなかで生きるための知恵と意志。
そしてもうひとつが、決して主人を裏切らぬ道具である。
セロー225。ヒマラヤカモシカの別名をタンクサイドに配したこのマシンは、
まざしくアウトドアでの道具。ライダーのマウンテニアリング・ブーツだ。
さて、あと必要なのは、あなたの気概だけである。

SEROW 225
MOUNTAIN TRAIL

山 COSMIC EXISTENCE

地球は、生きている。

「地球は、鼓動している。まるで生きているようだ」、とスペースシャトルのパイロットは呟いたという。そう、地球も"宇宙生命"。我々は生き物の上で、生きているわけだ。

自然は、その木々の香りに至るまで、人に恩恵をもたらしてくれる。それに比して我々は、いったい自然に対してどんな施しをしてきたというのだろう。生きている地球。生きている我々。両者がもっと親しく、もっと理解しあうために、モーターサイクルはとても素敵な手段だと思うのだが。

宇宙から眺めることができれば、自分の目で、自分のものとして、地球が生きていることを確認できる。地球は宇宙のなかで、全宇宙のエナジーとバランスを保ちながら、心臓のように脈を打ち続けている。つまり、ひとつの"宇宙生命"であるといえるだろう。

地球が心臓であるとするなら、さしずめ木々が生い茂る山々や、川が流れる豊かな大地、そして生命の母なる海など、この地上に広がる大自然こそが、たぶん筋肉の役目を果たしているのだろう。

昔、人間は自然から色々のことを学び、様々な恩恵を受けてきた。だが、コンクリートで覆われた大地は、人間に何も与えてはくれない。健康な自然が大切であることに、いま人々はようやく気付き始めた。そして、このことは我々ライダーにとっても、あながち無縁であるとはいえまい。

陽 WE ARE ON THE EARTH

生きているものは、移動する。

あなたがライダーなら、理由もなく無性にバイクで駆けたくなるときがあるだろう。その理由は、実は自然のなかにあった。生命ある限り変わり、移動し続けるのが、自然の法則。そして我々ライダーも、自然の構成員に他ならないのだから。

地球は、動いている。太陽も、宇宙も、動いている。地上の生きとし生けるものもすべて、いのちある限り移動(=変化)を繰り返しているのである。だから人もまた、さしたる理由もないのに、どこかへ行きたくなるのだろう。ライダーなら、リヤシートにバッグを縛り付けて、旅に出るわけだ。それはとりもなおさず、ライダーが自然の一部であることの証明。

ところが、そんな自然について、自分はいったい何を知っているのだろうか。そんな疑問を持ったライダーが、確実に増え始めたようだ。自然を知りたい。もっと、大地の奥深くへ入っていきたい。ただのナチュラリストとしてではなく、もっとハートに近いところで、大自然と親しくしたい…。

そんなライダーに、競技に勝つためのスペックは無用だ。モトクロッサーではなく、トライアラーでもない。トレールマシン、つまりけもの道を走るためのモーターサイクルこそが求められる。いや、オフロードマシンの原点は、ここにあったはずだ。セロー225。この一台は、マウンテントレール。確実にライダーを大地の懐へと運ぶ、本来のトレールマシンだ。スペックなどの詳細はカタログに譲り、ここではセロー225とともに、大自然のなかで生きるための知恵と意志について、そのほんの触りを書いてみよう。

モトクロスやトライアル競技をするために、山へ入るのではないから、ともかく安全に、確実に前へ進むことを心がけるべきだ。軽量な車体、頑丈なプロテクター類、そして3ヶ所に設けられたハンドルスタンディングが、"人力"による前進をも可能にした。タイムや、足を着くことにはからう注意力があれば、その分を自然の享受へ向けてほしい。

水辺は、ウイルダネスでは、動物たちの社交場だ。様々な動物たちが、集まったり、決められたかのような順番で水を飲みに来たりする。水が無ければ生きてゆけぬことを、動物も、鳥たちも、よく知っているのに違いない。だから、洗車気分で水に飛び込むなど、間違っても行ってはならない。第一、渡渉は思っている以上に危険であることを知るべきだ。水底は泥や水草で滑りやすいし、水深は読みにくい。さらに、流れの力は案外強いのである。高いポテンシャルを誇るセローといえども、自然の力にはかなわない。慎重第一で臨みたいものだ。

森 HOW TO LIVE IN WILDERNESS

生きることは、易しい。厳しい。

人間の遺伝子には、サバイバルの本能が備わっているという。自然のなかで生き残るための"心のそなえ"は、誰でも生まれながらに持っているわけだ。しかし文明は、人間の本能を眠らせてしまう。20世紀後半を生きる我々は、まず生まれ備えた感性を研ぎ澄ますことから始めたい。

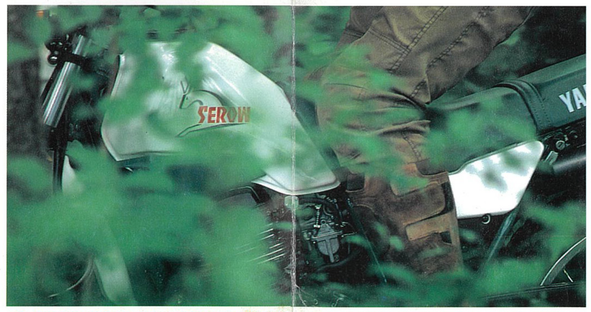
サバイバル、というと、何か特殊な技術のように思われがちだが、実は誰もが普段から無意識に行なっている。種の保存もそうだし、都市というシェルターで暮らすことも、集団サバイバルを意味している。ところが文明の恩恵に慣れきってしまった我々にとって、本能だけを頼りに大自然のなかへ飛び込むことが、素手で猛獣に立ち向かうことと等しくなってしまった。

でも、ありがたいことに、我々はそうした困難を最小限にとどめる方法を、手に入れることができる。それは、大地に熱いラブコールを送り続けた冒険者や、自然とともに生きるマナーを身に付けた森の紳士たちが教えてくれる、"生きるための手引"。そしてもうひとつが、我々ライダーにとっての、セローのようなモーターサイクルであろう。

さて、実際にバイクで自然のなかを走り回ってみよう。我が国は人口密度も土地の利用率も高いから、絶望的な極限状態に陥ることはまれである。むしろ地形や天候などの判断を誤ったために引き起こす事故に注意したい。

自然のなかに入り込んだら、まず自分の位置やこれから進むコースを掌握する。特に初めて訪れる場所では、移動しているあいだに目立つ目標物を注意深く観察しておくことが重要だ。たとえば、林道からトレールへ入り、森林を走り回る場合(これこそがセローの醍醐味なのだが)、進路の前方にある木を2本選び、その木の間を通過したら次にまた2本というように走り、自分のコースを記憶してゆく。もしもまわりが同じように見える地形だった場合は、この方法はあまり効果がないので、岩や石ころを動かしたりして目印を残す必要がある。ただし木の幹を傷付けるような目印は、身に危険を感じているような非常事態時以外は、厳に謹まねばならない。

ルートに迷う原因のひとつに分岐点がある。そこに出くわしたら、一番歩かれている感じの道を選ぶこと。それでも自分の位置を見失ってしまったならば、退却こそが最善の道である。



こういうケモノ道は、もちろんケモノたちのための道だから、十分な配慮をもって走りたいものだ。モトクロスでは、派手に土煙を上げるのもカッコいいが、ウイルダネスで同じことをすれば、それは自然破壊。元に戻す管理人はいないのだ。120/80-18のワイドトレッド・リヤタイヤと、豊かなトルクの223ccエンジンを備えたセロー225は、ウイルダネスでのジェントルな走りが身上。ケモノたちに嫌われることのないように、マウンテン走行を楽しみたい。それにしてもセロー(ヒマラヤカモシカ)、こうして見ると、まさに野生動物の面構えをしている。

こんなときライダーは、セロー225のしたたかさを頼しく感じるに違いない。しなやかなサスペンションと長いホイールトラベルが、安定した走りを生む。くるぶしでマシンを押さえこめるフラットなフレーム。そしてなにより、レスポンスに優れ、トルクフルなパワーユニットが、マシンコントロールを容易にしてくれるのだ。また、車体がスリムである点も見逃してはならない。しかも、数値的にスリムなのがよいのではない。サイドスタンドをリヤアームに取り付けるなど、木や草に"引っかかる"部分を減らしたスリムさが、ケモノ道で本当に役に立つセロー225のスペックなのである。

川 RETURN TO THE NATURE

全身を、アンテナにしよう。

ただ自然のなかを通り過ぎただけでは、何も気付かない。だが感性というレシーバーを使えば、地球が発信している信号を、理解することができる。大自然の素晴らしさを、十二分に堪能できるのだ。

「歌いはじめる時間は、まるで時計のように正確だ。毎晩、日没から計ったある時刻に5分とずれずに…」。

ヘンリー・D・ソローは、その著書『森の生活』のなかで、聞こえてくる夜鷹の声の時間の正確さに驚いている。

自然の世界は、不思議に満ち溢れている。決まった季節に花は咲く。地上に吹雪が吹き荒れていようとも、ミミズクの歌は森に春の到来を告げる。シロイタチやリスは、春になれば子を産む。我々ライダーだって、春になったら胸が騒ぎ始めるではないか。

動物や植物たちを決まった時間、季節に動かすものは、光だといわれている。よし、それでは我々も、光を頼りに行動してみよう。時計は気にしない。光がなくなる日没とともに、眠りにつけばいいのだから。

マウンテントレール、セローが、森であなたの行動半径を拡げる。光だけでなく、風や雲の表情にも気を配ろう。オゾンをたっぷりふくんだ、森の風。高空の大気の流れを表す雲は、格好の天気予報。みんな、地球の呼吸を示すインフォメーションだ。そして、ときには雨のシャワーでも浴びようか。この雨の一雫にも、地球46億年の、宇宙150億年の歴史が秘められている。森を走れば、様々な動物も迎えてくれるだろう。一台のモーターサイクルが、大自然への大きなパスポートとなるのである。

地球は言葉にならない言葉で、あなたにメッセージを囁いている。光、音、風、雲、雨、そして鳥や動物たちの声や動き、木々や花の色などによって、あなたに、実にたくさんのことを語りかけている。さあ、全身をアンテナにしてみよう。

数あるビークルのなかから、最も自然と体で接することのできる乗り物、モーターサイクルを選んだあなたになら、きっと大地の声が聞こえてくるに違いない。そのときあなたは、きっと、自分が大自然と一体だったことに、改めて気付くのだ。

強じんな体を持っていても、心にストレスがたまっていたら、本当の健康体とは言えない。そして、透き通ったきれいな水であっても、目に見えない毒素が混じっていれば飲めない。全てに健康な自然があってこそ、人間は豊かに暮らせるのである。

サバイバル・ユニットがあるからといって、大自然に挑戦するなんて無謀すぎる。大自然の中では人間はちっぽけな生き物であり、無力であることを念頭におきたい。それが本当のサバイバルであり、道具は人に使われて初めて生きてくるものなのだ。

ただ、バイクの轍だちのみをトレイルにしるす。ライダーの心には、すでに大自然のバイブが刻み込まれている……。

動物たちの体は、機能的だ。すべての部分のカタチには、理由がある。ひるがえって私たちが使う日常の道具の、なんと猥雑なことか。あまりにも多くの機能を求めすぎて、かえって本来の機能を見失っている。モーターサイクル。現代の道具のなかで、これほど機能的なものも少ないと思うが、セロー225。このマシンはどうだ。贅肉をそぎ落とした、軽くしなやかな体。しかし走る、曲がる、止まる、という機能のためには、パーツも、設計自体も、徹底的に鍛え抜かれている。セロー225。これなら野性の動物たちも、仲間としてあたたかく迎え入れてくれると思うのだが。

SEROW225
●4-stroke, OHC, Single●223c.c.
●20ps/8,000r.p.m.●1.9kg-m/7,000r.p.m.
●329,000YEN(北海道および沖縄を除く)

MOUNTAIN TRAIL

Photographed by HIROYUKI NEGISHI

発行・ヤマハ発動機株式会社　〒438 静岡県磐田市新貝2500　TEL.05383(2)1111
8507-10D1Ⓐ-011044

Photographed by HIDEAKI SATO